

令和 6 年 6 月 25 日現在

機関番号：23803

研究種目：基盤研究(A)（一般）

研究期間：2018～2022

課題番号：18H03606

研究課題名（和文）アフリカ遊動社会における接合型レジリエンス探求による人道支援・開発ギャップの克服

研究課題名（英文）Exploration of the articulated resilience to overcome the humanitarian-development gap in African nomadic societies

研究代表者

湖中 真哉（Konaka, Shinya）

静岡県立大学・国際関係学部・教授

研究者番号：30275101

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 33,700,000円

研究成果の概要（和文）：アフリカの遊動民社会は、現在、飢饉と飢餓、低強度紛争、気候変動等の多くの不確定要因を抱えており、それに対応した新たな人道支援と開発の理論構築が求められている。本研究は、レジリエンス概念およびレジリエンス思考をアフリカ地域社会の現場から照射し、そこから批判的に考察することを通じて、レジリエンスへの「関係/脈絡論的アプローチ」という新たなアプローチを創造した。それは「レジリエンスは動詞である」という定言に要約される。このアプローチは、普遍的概念としてのレジリエンスを脱却し、この概念を現地の脈絡に着地させつつも、グローバルとローカルの二元論を乗り越え、関係性のダイナミックスとして捉え直すものである。

研究成果の学術的意義や社会的意義

レジリエンス概念は、最重要概念のひとつである。しかし、日本におけるレジリエンスの研究は、欧米の動向を国内向けに紹介しただけのものが多く、理論的レビューおよび現地調査成果をもとに、それを批判的に検討し、レジリエンスへのアプローチを新たに開拓することを試みた研究は少ない。本研究では、従来のレジリエンス概念が、システム論、実体論、個人心理論に偏重してきたことを批判的に検討しながら、新しいレジリエンスへのアプローチとして、「関係/脈絡論的アプローチ」を創造した。それは、持続可能な国際開発や人道支援の実践において、レジリエンスが動詞であることを前提とした新しい理論と実践に貢献する意義があると考えられる。

研究成果の概要（英文）：African nomadic societies are currently confronting various uncertainties such as famine, hunger, low-intensity conflict, and climate change, which call for the reconstruction of new theories of humanitarian assistance and development embracing them. This study creates a new “relational/contextualist approach” to resilience through a critical examination of the concept of resilience and resilience-thinking from the field of African communities. It can be summed up in the statement that “resilience is a verb”. This approach moves away from resilience as a universal concept and recaptures resilience as a relational dynamic, rooted in the local context and overcoming the dualism of global and local.

研究分野：地域研究

キーワード：レジリエンス 遊動民 国際開発 人道支援 遊牧民 アフリカ 牧畜民 紛争

1. 研究開始当初の背景

本研究、および前研究課題の主要な対象である東アフリカ遊牧社会は、南スーダン、ソマリア、エチオピア、ウガンダ、ケニア等の半砂漠地帯にわたっているが、1985年のエチオピア飢饉以降、国連および各国の国際援助機関は、飢饉が発生する度に、人道支援を継続的に実施してきた。また、地球規模の気候変動の影響で、この地域の飢饉の主因となっている旱魃がより悪化していくと予測されている。

この地域では、冷戦体制崩壊以降に紛争が頻発した結果、強力な殺傷能力を持つアサルトライフル銃が蔓延し、多くの地域で紛争の規模を拡大させた。彼らが暮らす国家の周縁部では、各国家の軍隊や警察による安全保障が及んでいないことが多く、テロリストや民兵が跋扈する事実上の無法地帯と化している地域もあり、多くの難民と国内避難民が発生した。

このように彼らの社会では、人道的危機とそれに伴う人道的支援が常態化しつつある。こうした状況に対して、グローバリゼーション過程を視野に入れつつも、外部からの一方的な援助漬けではなく、地域住民自身の自発的意思とアフリカ遊動社会の内在的特性に基づいて、彼ら自身の尊厳を回復できるような人道支援と開発援助のモデルが長らく求められてきた。

2. 研究の目的

アフリカの遊牧民社会は、現在、飢饉と飢餓、低強度紛争、気候変動等の多くのリスク要因を抱えており、それに対応した新たな人道支援と開発の理論構築が求められている。従来、彼らの社会に対しては、遊動から定住へ、生業経済から市場経済への一方向的発展プロセスを前提としたリスク回避型の開発モデルが一方的に適用されてきた。これに対して、本研究は、臨地調査研究に基づき、グローバルな領域とローカルな領域の接合状況を接合型レジリエンスとして理論化することを試みた。これにより、一方向的発展過程を、双方向的で後退可能なリスク受容型の開発モデルに転換することを試み、人道支援と開発援助の間のギャップを地域住民自身がつまみ直せる手法を開拓することを目的とした。最終的に、研究成果を総括して、地域研究の立場から、アフリカ遊牧民に対する従来の「開発」概念そのものを根源的に刷新することを目的とした。

本研究の探究の結果、グローバルな領域とローカルな領域の接合状況は、おもに遊牧民の生業の多角化 (livelihood diversification)、土地の断片化 (land fragmentation)、都市化、アサルトライフル銃や携帯電話等の外部からの新しい「もの」の導入等において顕著に観察されることが判明した。それらは、研究成果における各論文において詳細に記述・分析されている。その一方、後に述べるように、本研究は、関係/脈絡論的アプローチを創造したが、このアプローチによれば、グローバルな領域とローカルな領域の接合状況は、再帰的な相互作用プロセスとして捉え直される。このように当初想定されていた「接合型レジリエンス」という概念は、レジリエンスを脈絡の中における「動き」として捉える新しい概念にむしろ発展解消していったと言える。

3. 研究の方法

本研究は、人類学、地域研究、開発経済学、国際関係論等の多くの専門分野の研究者によって学際的に研究組織を編成したため、それぞれの専門分野によって研究方法は異なっているが、人類学、地域研究系の研究では、おもに、参与観察法と半構造的インタビューによるフィールドワークを主要な研究方法として研究を展開した。

本研究は、一貫して国際的・学際的な体制のもとに推進した。国際性について言えば、本研究では国際共同研究体制をとり、海外の研究者と国際会議を開催し、討議を繰り返すことを積み重ねて、研究を練り上げる方法を採用した。本研究の方向性がみえて形になりはじめたのは、ポーランドのボズナンで2019年8月に開催された国際人類学民族科学連合中間大会であり、研究代表者とサヴェリオ・クラトリ (国際人類学・民族学連合遊牧民委員会) が共同招聘者となって開催した国際会議のパネル「Pastoralists and Resilience: Rethinking the Inside and Outside Perspectives of the Pastoral Communities」であり、遊牧民研究者16名が参加した。また、2020年2月にはナラティブ・アプローチによって開発学に多大な影響を与えたエメリー・ロー (米国カリフォルニア大学パークレイ校重大リスク研究所) を招聘して、慶應義塾大学で国際ワークショップ「Thinking Resilience and Development from the “Exceptional” Africa」を開催し、2021年1月には、榎本がインドの人道支援活動家ビナラクシュミ・ネプラム氏を招聘してオンライン・シンポジウム「Past, Present and Future of Humanitarian and Development Aid: Rethinking the Aid Sector with Binalakshmi Nepnam」を開催した。

4. 研究成果

本研究の研究成果は、最終的に全体として総合的にまとめられたものとしては、研究組織構成員を執筆者とする査読付き国際学術誌の特集号と英文、和文による学術出版によって刊行された。まず、研究代表者と米国エモリー大学ピーター・D・リトル教授が共同編集者となり、レジリエンス特集号「Rethinking Resilience in the Context of East African Pastoralism」

(*Nomadic Peoples* 25(2) 2021年)を出版した。また、研究代表者とグレタ・センブリチェ、ピーター・D・リトルが編集した英文単行本は、国際共同出版により2023年に刊行された(S. Konaka, P.D. Little and G. Semplici (eds). 2023. *Reconsidering Resilience in African Pastoralism: Towards a Relational and Contextual Approach*. Trans Pacific Press, 2023年)。さらに、日本語単行本(湖中真哉、グレタ・センブリチェ、ピーター・D・リトル編著『レジリエンスは動詞である アフリカ遊牧社会からの関係/脈絡論アプローチ』(京都大学学術出版会 2024年)は2024年に刊行された。以下、同書の概略を紹介する。まず、研究代表者がグレタ・センブリチェ、ピーター・D・リトルらと共同でとりまとめた研究成果の概要は以下の通りである。

レジリエンスは学際的な用語であるとともに日常的な用語でもあり、ラテン語の *resilire* または *resilio*(跳ね返る、跳ね戻る)に由来し(Masten and Gewirtz 2006; Klein, Nicholls and Thomalla 2003)、「回復する/跳ね返る(bounce back)」能力を意味する。

学術用語としての起源は物理学と数学にあると言われているが(Van der Leeuw and Leygonie 2000; Norris et al. 2008; MacKinnon and Derickson 2012) 1970年代以降の適用例の多くは、主として生態学と心理学の分野に見られる。その後、この概念は、経済学、地理学、人類学、環境科学など、他の分野や領域へ徐々に広がっていった。多くの研究分野に影響が波及していく過程で、レジリエンスは、多種多様な危険や脅威の下でみられる様々な対応を適当に表現するのに便利な「なんでもあり」の言い回しになってしまった(Manyena 2006; Brand and Jax 2007; Chandler and Coaffee 2017)。

現在、多くの分野は、「変化を受けながらも、攪乱を吸収し、再組織化することで、本質的に同じ機能、構造、アイデンティティ、フィードバックを保持するシステムの能力」(Walker et al. 2004: online)というレジリエンスの最初の定義から大きく離れたところに位置している。今日ではレジリエンスに対して、より動的なアプローチが、国際開発、人道支援、災害管理、都市計画、安全保障を含む多くの学術・専門分野で一般的になっている。しかし、レジリエンス概念が批判を免れているわけではもちろんなく、レジリエンス概念に極めて批判的な研究者も数多い(Brown 2015; Scott-Smith 2018; Cannon and Müller-Mahn 2010, Chandler 2020)。

本研究では、こうした先行研究を踏まえた上で、本研究の独創性として、三点の新しいアプローチを提出した。すなわち、(1)概念のローカル化、(2)存在論的枠組みの再構成、(3)閉じたシステム論を乗り越えて政治的関係を含めた多様な関係を考察する動向、という三点の研究成果である。これらを総称して、本研究組織は、本研究が新たに開拓したアプローチを関係/脈絡論的アプローチ(*relational and contextual approach*)と呼んでいる。

(1) 概念のローカル化

レジリエンス思考に関するひとつの問題は、これに関連する概念が傾向として一般性、普遍性、中立性を前提としてしまっていることである。この意味ではレジリエンス概念は、低開発から紛争、環境危機まで、ありとあらゆる政策立案に採用できる魔法の特効薬のようなものを創りあげたいと願う幻想の産物に過ぎない。そうした傾向は、社会生態的関係を新自由主義的な方向に向けて踏み固める目的に対してレジリエンス概念を奉仕させているに過ぎないのではないかという批判を浴びる結果を招くこととなった(MacKinnon and Derickson 2012; Evans and Reid 2014; Duffield 2012)。その新自由主義的な方向を構成してきたのは、私有化、個人化、規制緩和、市場経済化、脆弱性の常態化といった要素である。一方、現実に戻れば、レジリエンスは社会によっても文化によっても大きく異なっているのが実情である。普遍的に適用できる万能のモデルのようなものなど何処にも存在するわけではないのは明白である。

レジリエンスの人類学的研究は、生態学と心理学の場合よりも、全体論的な視点や地域の文化的視点により重点を置く傾向にある(Oliver-Smith 2017; Crane 2010: online)。本研究が提案するひとつめのアプローチは、これらの主張と符合しており、レジリエンスへの脈絡論的アプローチ(*contextual approach to resilience*)を推し進めるものである。この点に関して言えば、遊牧民、研究者、政策立案者をはじめ、レジリエンスに関わる様々なステークホルダーの「立ち位置(*positionality*)」が脈絡論的に定まらなければ、レジリエンスの問題は何一つ論じることができないと言ってよい。言い換えると、レジリエンスに関するいかなる研究も、「誰のための誰によるレジリエンスなのか」(Little and McPeak 2014; Chandler and Coaffee 2017)という問いかけを置き去りにしたままに進めるべきではないことを本研究は示唆するものである。

(2) 概念の存在論的転換 レジリエンスと近代主義の超克

チャンドラーが述べているように、レジリエンスへの普遍的なアプローチは、近代の図式を具体化したものであり、問題を外的なものとして措定する一方、解決策の方は内的なものとして捉え、現地能力を構築し、それを可能にすることで解決可能なものとして想定している。それゆえに、わたしたちが直面することになる問題を、わたしたち自身が作り出しているにもかかわらず、その共同責任を負うことから免れられる仕掛けになっている(Chandler 2020)。しかし、近代の世界がわたしたちの外部に存在していて、それがわたしたちのコントロールでまだまだなんとかなると想定することはもはや不可能であり、内部(人間)と外部(人間以外、自然、環境)、ローカルとグローバル、伝統と現代を明確に区別することはもはや不可能とみるべきであろう。

そのような二分法は、かつては文明化、進歩、開発といった近代主義的なプロジェクトの顕著な特徴であったが、今日では人新世の進行に行く手を阻まれるようになった。存在論的境界論の点から見ると、「こうした『リベラル』な二分法は近代のアプローチの遺産として理解されるが、その特徴は『還元主義的』な点に求められる。こうした還元主義は、本当は複雑性に満ちているはずの世界を、分離され区分された個別の対象に単純化してしまい、その中で絡み合っているダイナミックな関係性からは目を背けてしまう」(Chandler 2014: 7)のである。本研究が提案する二つめのアプローチは、「存在論的枠組み (ontological framing)」とも呼べるものに基づいている。この枠組は、現地の人々のものの見方を取り入れ、さらに自然と人間以外の世界にもエージェンシーと創造性を割り当てて通じて、知識構築の科学認識論に疑問を呈し、これまでの存在論的二分法を刷新する。

(3) 関係論的アプローチ 開かれたネットワークとしてのレジリエンス

これまでの粗野な二分法を回避することで、対象を別々に区分し、区分されたそれぞれの単位を強固に定まった実体とみてしまう従来の見方に別れを告げ、関係性 (relations) と開放性 (openness) からなる見方への視野が拓ける。したがって、本研究が提案する三つめのアプローチはレジリエンスに関係論的アプローチ (relational approach) を適用することである (Chander et al 2020; Schreiber 2021; Darnhofer et al 2016; Schluter et al 2019)。近年、社会生態学的関係を理解する方法は、より相互作用的な方法に転換している。ある何かの実体を確定し、その状態や安定性、それがもつ属性、あるいはどういう行動ができるかという能力に着目することは徐々に少なくなっており、関係論的ネットワークを通して、むしろその実体がいかにして現れるようになったのかを問うたり、いかにしてその在り方が絶えず形づくられてきたのかを問うたりすることへと重点が移っている (Folke 2021; Hertz et al. 2020; West et al. 2020)。この射程に倣えば、レジリエンスは、もはや上から押しつけられた一連の原則によってではなく、もし何かに対する介入が計画された場合、その結果に影響を与えるであろう関係論的脈絡によって描き出されるものとなるだろう。ここで重要なのは、もはやなにかの実体がもともともっているようなレジリエンスではなく、「AのBに対するレジリエンス」(Grove 2018: 8)である。ここで言うAとBそのものは閉じられた均質な単位ではなく、時間が経つにつれて変化を繰り返す不均質な集合体 (assemblages) なのである。このようなアプローチによってのみ、レジリエンスは変化、および、変化を可能にする、または変化を抑制するより幅広いパターンを適切に照らし出すことができる。

本研究では、遊牧民のレジリエンスの研究に、脈絡論的 (contextual)、存在論的 (ontological)、関係論的 (relational) 射程などの要素を組み込んだ (Chandler 2014; Little and McPeak 2014; McPeak and Little 2017; Krätli 2017 参照)。それが強調するのは、チャンドラーが言うようなレジリエンス概念の役割である。「レジリエンス概念は、非線形性 (予期せぬ結果) に着目することで、近代的な主体中心の (強い主体性を前提とする) 射程から、(関係論的な、埋め込まれた主体性を前提とする) 関係論的存在論への転換において、その転換を押し進める役割を果たしてきた」(Chandler 2014: 9)。したがって、本研究の射程は、遊牧民のレジリエンスが、具体的な脈絡と関係性の中に埋め込まれている複雑で非線形のダイナミクスであることを示唆するものである。そこでは現地の遊牧民のものの見方が優先され、逆に近代的思考法と、あらかじめ仮定された二分法は退けられねばならないことになる。

つぎに、日本語単行本 (湖中真哉、グレッタ・センブリチェ、ピーター・D・リトル編著『レジリエンスは動詞である アフリカ遊牧社会からの関係 / 脈絡論アプローチ』(京都大学学術出版会 2024年) 所収の各章をもとに各研究組織構成員による最終成果論文について概観する。

島田による論文は、援助はアフリカのレジリエンスに果たして貢献しているのだろうか、という根源的な問いを提起している。島田は、アフリカ各国のパネルデータを活用しながら、気候変動に由来する自然災害がもたらしてきた被害を評価し、援助がそうした被害を抑制することができたのかを考察した。島田の洞察は、アフリカにおける援助とレジリエンスが、単純に援助や支援をインプットすればその効果が一定のレジリエンスとしてアウトプットできるといった単純な図式には収まらないことを示しており、マクロレベルから関係・脈絡論的アプローチを基礎付けている。

榎本による論文は、20世紀半ば以降、開発・人道分野で主流の議論がどのように移り変わってきたのかを考察し、そうした移り変わりが「レジリエンス」という用語の利用の広がりにつながるのかを批判的に分析することで、関係 / 脈絡論的アプローチに批判的視座を導入している。

リトルの論文では、レジリエンスの概念を用いて、1980年から2018年までの期間におけるケニア・バリンゴ県のイルチャムスの生計と資産の多様化が考察されている。彼は、様々な世帯集団の多様化傾向を取り上げて、女性または男性が世帯主となっている富裕世帯と貧困世帯ともに遊牧以外の生計戦略と資産を追求しているものの、その機会の在り方はジェンダーと階級によって大きく異なることを論じた。彼は関係 / 脈絡論的アプローチを採用することで、レジリエンスをめぐる多様な関係性と脈絡を解明している。

佐川の論文も東アフリカの遊牧民の生計が多様化していることに光を当てているが、より文化的な枠組みを通じてそれが描かれている。遊牧民は経済的必要性からだけでなく、文化的価値観

から、また社会的関係を維持するために生計を多様化していることを佐川は指摘している。関係・脈絡論的アプローチを援用することで、佐川は遊牧社会を取り巻く社会的・政治的脈絡が変化するのに伴って、遊牧以外の活動に対する現地の人々の評価と態度も変化してきたと結論づけている。

センブリチェの論文は、ケニア北部の遊牧民トゥルカナの間で見られる「ライヤ (*raiya*)」という概念を、関係/脈絡論的アプローチを援用しながら分析することで、文化的レジリエンスの見どころとしてきた側面である「レジリエンスとアイデンティティ」の問題を提起し、民族誌的に解明している。

ハッサンの論考は、2016年のケニアの土地制度改革の後、サンプルの放牧地のある場所において、土地保有制度が変化し、土地細分化が進行する渦中で、サンプルの女性が採用したレジリエンス戦略を、ジェンダーの側面に着目しながら論じた。レジリエンスのジェンダーに関係する性質が明らかにしたのは、コミュニティと土地保有制度の変化に伴って、遊牧民の様々な関係性がどのように変動してきたのかという点であり、この発見は、レジリエンスへの関係論的・脈絡論的アプローチの重要な貢献と言ってよいであろう。

湖中の第一論文は、エメリー・ローによる信頼性遊牧民理論を援用して、2004年にケニアのサンプルとポコットの間に勃発した一連の紛争における群集集落の形成と携帯電話を用いた異民族間連絡網を分析しており、「遊牧社会のレジリエンス」について、これまでの思考法と学問の境界に囚われない新しい考え方を提示している。

湖中による第二論文は、ケニア北部のサンプル、トゥゲン、イルチャムス 2004年のポコットとの紛争で避難した人々の民族誌的事例研究を用いて、東アフリカの遊牧民の物質文化と人道支援との関連から、レジリエンスの概念を関係/脈絡論的に考察し、ものと人、および自己と他者の関係をより根源的に掘り下げている。全てを失った人々が、彼らの身体の一部と見なしている最低限のものを取り戻すことで、復興に向かって進み得ることを指摘した湖中の研究結果は、重要なレジリエンスの起点を提示している。

波佐間による論文は、ウガンダのドスとカリモジョンにおける遊牧民のシティズンシップに着目しており、遊牧民が家畜の行動を解釈することによって、家畜に政治的な主体性を認めており、それを通じて家畜を遊牧民の共同市民と認識していることを論じている。遊牧社会のレジリエンスは人間と動物を結ぶアイデンティティと社会的関係の中に埋め込まれていることを本論文はよく示している。

ゴンザレスの論文はマリ北部のケル・タマシェク(トゥアレグとも呼ばれる)の複数の家庭に関する事例研究を扱いながら、移動と非移動に関わる実践が、遊牧・遊牧民にとって都市空間における新たな可能性を捉えるための臨機応変な戦略になっていることを例証した。

小川による論文は、商機を求めてアジアの各都市を渡り歩くタンザニア商人たちの事例を扱いながら、インフォーマル経済従事者による「待つ」という営みがどのように再構築されていくのかを論じており、それを通じてインフォーマル経済が維持・再生するダイナミズムとそこに示されているレジリエンスを考察している。

村尾は、難民化した農耕民ムブンダのレジリエンスを支える内的な支援の在り方を検証するために、彼らが難民居住地と再定住地の両方で社会的関係を再組織化していったことを論じている。土地私有化に対するアフリカ農民のレジリエンスの在り方は、それが個人によるものか、チーフによるものかという二分法に基づいてしばしば想定されているほどには、アフリカの遊牧民と大きく異なっているわけではないことを解明しており、レジリエンスの比較研究に道を拓くものである。

以上が、本研究が研究成果として提案する関係/脈絡論的アプローチ、およびその具体的な適用例の概要である。本研究の研究成果を総括し、評価したのは、英国サセックス大学開発学研究所のイアン・スクーンズであり、同氏は「レジリエンスは動詞である」という印象的なフレーズのもとに、本研究の理論的射程とその総括を提示している。本研究が辿り着いた見解を一言に要約すれば、レジリエンスは脈絡の中での動きにこそあり、また、そこにしかないということである。

これによって、本研究は、これまでのような普遍的で中立的なレジリエンスのモデルを超えて、これまで顧みられなかったアフリカにおけるレジリエンスについての様々な側面を明らかにした。その様々な側面は、政治的権力、国家による介入、経済的不平等、ジェンダー、人間・動物間関係、テクノロジー、地域的ネットワーク、文化的アイデンティティ、遊牧民の価値観等に多様な領域に及んでいる。今日のような複雑で不安定になりつつある世界において、単一になりがちなレジリエンスの概念を、多様な射程と多様な現場から考え直す実践が、多様な生きられた現実とそれを取り巻くネットワークに基づいて、レジリエンスを理解したり実践したりする新しい将来への道筋 (*pathways*) へと導いてくれることを本研究の成果は示唆している。こうした本研究が提案するレジリエンスへの関係/脈絡論的アプローチは、従来の持続可能な開発や人道支援の在り方を根源的に再考し、それを新しく再創造する上で意義があると考えられる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計38件（うち査読付論文 25件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 21件）

1. 著者名 Shinya Konaka	4. 巻 23(2)
2. 論文標題 The Material Culture of Displacement: Ontological Reflections on East African Pastoral Internally Displaced Persons	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Japanese Review of Cultural Anthropology	6. 最初と最後の頁 47-87
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Tamara Enomoto	4. 巻 14
2. 論文標題 Racism in the Development and Humanitarian Aid and Advocacy Sector	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 History of Global Arms Transfer	6. 最初と最後の頁 9-16
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 榎本珠良	4. 巻 70(4)
2. 論文標題 ロシア・ウクライナ戦争をめぐる言説における人種主義：歴史的・政治的背景と危険な帰結	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 海外事情	6. 最初と最後の頁 58-72
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Koji Oishi, Hiroto Ito, Yohsuke Murase, Hiroki Takikawa, Takuto Sakamoto	4. 巻 17(8)
2. 論文標題 Evolution of global development cooperation: An analysis of aid flows with hierarchical stochastic block models	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 PLOS ONE	6. 最初と最後の頁 e0272440
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1371/journal.pone.0272440	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 小川さやか	4. 巻 7
2. 論文標題 環太平洋文明研究センターのこれから 災害・食糧危機に強いレジリエンスのある社会の創造を目指して	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 環太平洋文明研究	6. 最初と最後の頁 78-82
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Rumiko Murao	4. 巻 42
2. 論文標題 "Introduction:Rethinking Localities of Rural Development in Angola"	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 African study monographs	6. 最初と最後の頁 161-163
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.34548/asm.42.161	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Rumiko Murao	4. 巻 42
2. 論文標題 "The Endogenous Reintegration of Post-Conflict Angola Society"	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 African study monographs	6. 最初と最後の頁 205-221
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.34548/asm.42.205	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 村尾るみこ	4. 巻 103
2. 論文標題 紛争による人の移動がもたらす農業イノベーション アンゴラとザンビアの国境地帯の事例	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 アフリカ研究	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Shimada, Go	4. 巻 19
2. 論文標題 The impact of climate-change-related disasters on Africa's economic growth, agriculture, and conflicts: Can humanitarian aid and food assistance offset the damage?	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 International Journal of Environmental Research and Public Health	6. 最初と最後の頁 467
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.3390/ijerph19010467	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Shimada, Go	4. 巻 31
2. 論文標題 Is Kaizen Effective in Developing Countries? The Universality and Distinctiveness of Kaizen	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Journal of International Development Studies	6. 最初と最後の頁 9-20
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.32204/jids.31.3_9	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Takikawa Hiroki, Sakamoto Takuto	4. 巻 54
2. 論文標題 The moral-emotional foundations of political discourse: a comparative analysis of the speech records of the U.S. and the Japanese legislatures	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Quality & Quantity	6. 最初と最後の頁 547 ~ 566
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1007/s11135-019-00912-7	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Ogawa Sayaka	4. 巻 20
2. 論文標題 The Logic of "Open Reciprocity" in the Tanzanian Union in Hong Kong and China	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Japanese Review of Cultural Anthropology	6. 最初と最後の頁 297 ~ 323
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.14890/jrca.20.1_297	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 湖中真哉	4. 巻 83
2. 論文標題 「グローバルな当事者間のニーズ共有接近法:ケニアのナロック県と日本の静岡県を繋ぐ人類学的教育実践の事例から」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『文化人類学』	6. 最初と最後の頁 631-641
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.14890/jjcanth.83.4_631	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 榎本珠良	4. 巻 6
2. 論文標題 「『レジリエンス』概念の拡散とアフリカ研究」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『多文化社会研究』	6. 最初と最後の頁 373-392
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Tamara Enomoto	4. 巻 8
2. 論文標題 History of Arms Transfer Control and Challenges Facing the Arms Trade Treaty	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『国際武器移転史』	6. 最初と最後の頁 3-18
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 阪本拓人	4. 巻 34(2)
2. 論文標題 「「平和に対する脅威」をめぐる: 国連安全保障理事会の議事録の定量的分析」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『理論と方法』	6. 最初と最後の頁 50-67
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Itaru Ohta	4. 巻 40(2, 3)
2. 論文標題 Rules and Negotiations: Livestock Ownership among the Turkana in Northwestern Kenya.	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 African Study Monographs	6. 最初と最後の頁 109-131
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.14989/244853	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 佐川徹	4. 巻 95
2. 論文標題 「エチオピアにおける食料安全保障政策と激変する農牧民の生活 大規模開発事業との関係に注目して」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『アフリカ研究』	6. 最初と最後の頁 41-92
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 佐川徹	4. 巻 45
2. 論文標題 「漁労を始めた牧畜民 ダサネッチにおける生業をめぐる文化的評価とその変化」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『社会人類学年報』	6. 最初と最後の頁 41-62
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Sagawa, Toru and Hazama, Itsuhiro	4. 巻 40(2)
2. 論文標題 Naturalography of co-existence among East African pastoral societies: An Introductory overview of Japanese scholarship	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 African Study Monographs	6. 最初と最後の頁 45-75
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.14989/244850	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小川さやか	4. 巻 84(2)
2. 論文標題 「SNSで紡がれる集合的なオートエスノグラフィー 香港のタンザニア人を事例として」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『文化人類学』	6. 最初と最後の頁 172-190
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.14890/jjcanth.84.2_172	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Sayaka Ogawa	4. 巻 20(1)
2. 論文標題 “ The Logic of Open Reciprocity ” in the Tanzanian Union in Hong Kong and China	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Japanese Review of Cultural Anthropology	6. 最初と最後の頁 297-323
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.14890/jrca.20.1_297	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小川さやか	4. 巻 74(11)
2. 論文標題 「気づかないふりで回す信頼と友情」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 群像	6. 最初と最後の頁 315-315
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小川さやか	4. 巻 92
2. 論文標題 世界が存在する偶然を	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 アステイオン	6. 最初と最後の頁 215-217
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 波佐間逸博	4. 巻 6
2. 論文標題 「レジリエントなアフリカ遊牧社会のマイクロ・エスノグラフィー」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『多文化社会研究』	6. 最初と最後の頁 339-372
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 波佐間逸博	4. 巻 6
2. 論文標題 「序：アフリカのレジリエンス：現代社会の困難を克服する創造性とフィールドワーク主義」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『多文化社会研究』	6. 最初と最後の頁 291-293
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 島田剛	4. 巻 712
2. 論文標題 貧困と雇用：アフリカにおける産業政策と経済学の役割	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 経済セミナー	6. 最初と最後の頁 39-43
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 湖中真哉	4. 巻 第83巻4号
2. 論文標題 「グローバルな当事者間のニーズ共有接近法 ケニアのナロック県と日本の静岡県を繋ぐ人類学的教育実践の事例から」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『文化人類学』	6. 最初と最後の頁 631-641
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 波佐間逸博	4. 巻 83巻2号
2. 論文標題 「北東ウガンダ牧畜民の抵抗におけるシティズンシップの実践」	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『文化人類学』	6. 最初と最後の頁 256-273
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Itsuhiro Hazama	4. 巻 6
2. 論文標題 Ugandan Pastoralists' Everyday Histories of Gun Acquisition and State Violence	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『国際武器移転史』	6. 最初と最後の頁 23-37
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Sagawa Toru	4. 巻 23
2. 論文標題 Waiting on a friend: Hospitality and gift to the 'enemy' in the Daasanach.	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Nilo-Ethiopian Studies	6. 最初と最後の頁 1-16
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Sagawa Toru	4. 巻 6
2. 論文標題 Arms availability and violence in the Ethiopia-Kenya-South Sudan borderland	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『国際武器移転史』	6. 最初と最後の頁 39-44
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 榎本珠良	4. 巻 7
2. 論文標題 「武器貿易条約(ATT)第3回および4回締約国会議の論点」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『国際武器移転史』	6. 最初と最後の頁 67-86
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 榎本珠良	4. 巻 第83巻第2号
2. 論文標題 「グローバル市民社会」から切り離されたエージェンシー：北部ウガンダ・アチヨリ地域の事例から	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『文化人類学』	6. 最初と最後の頁 193-212
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 島田剛	4. 巻 第27巻第2号
2. 論文標題 「国際開発におけるカイゼン研究の到達点と今後の課題 学際的アプローチからの政策的インプリケーションの検討」	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 国際開発研究	6. 最初と最後の頁 1-11
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 小川さやか	4. 巻 第83巻1号
2. 論文標題 「現代的な消費の人類学の構築に向けて」	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『文化人類学』	6. 最初と最後の頁 47-57
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 小川さやか	4. 巻 3
2. 論文標題 「緩慢な移動を可能にする海賊システム 中国・香港におけるアフリカ系交易人を事例に」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『環太平洋文明研究』	6. 最初と最後の頁 122-133
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小川さやか	4. 巻 11月号
2. 論文標題 「他動力」 香港のタンザニア人たちの多動力	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『現代思想』	6. 最初と最後の頁 148-158
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計45件 (うち招待講演 2件 / うち国際学会 12件)

1. 発表者名 Shinya Konaka
2. 発表標題 The Nomadic Ethics of Leaving No One Behind The case of Pastoralists in North-Central Kenya
3. 学会等名 International Conference 'Nomadic Ethics and Intercultural Dialogue' Panel 10 02 (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 湖中真哉
2. 発表標題 環境と平和のために森から退かせよ? ケニア中北部サンブル県キリシア丘陵の事例
3. 学会等名 日本アフリカ学会第60回学術大会報告
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Tamara Enomoto
2. 発表標題 Discrimination in “Humanitarian Disarmament” : The Case of the Arms Trade Treaty
3. 学会等名 4th Biennial Conference of the African Studies Association of Africa (ASAA) (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 阪本拓人
2. 発表標題 社会科学分野におけるオープンデータの活用:国際関係・人間の安全保障への適用事例を中心に
3. 学会等名 日本学術会議オープンサイエンス・データ利活用推進小委員会(第25期・第10回)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 阪本拓人
2. 発表標題 マルチエージェント・シミュレーションについて(概要、実問題への適用、分析事例等)
3. 学会等名 防衛省分析評価勉強会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 小川さやか
2. 発表標題 冒険を可能にする条件 商業と自前のセーフティネットの新たなつながりを築く
3. 学会等名 公開シンポジウム『アフリカの冒険的現代 偶然化に託す希望のチカラ』
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 小川さやか
2. 発表標題 自らの系譜を打ち立てる アジアとアフリカ間のSNSを介した交易を事例に
3. 学会等名 人間文化研究機構東ユーラシア研究プロジェクト全体集会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 小川さやか
2. 発表標題 人類史的にみた災害・食糧危機に対するレジリエンス強化のための学際的研究拠点の設立について
3. 学会等名 立命館大学第4期R=GIRO研究プログラム4プロジェクト合同シンポジウム『技術と人間の調和を超学際的に考える』
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 小川さやか
2. 発表標題 市場としての路上空間を自分たちの場所に変換する タンザニアの事例から
3. 学会等名 建築夜学校2022・シンポジウム『道/街路/ストリートについて 日本の街路に公共性はあるのか』
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Rumiko Murao
2. 発表標題 Socio-ecological perspective on southern African rural societies
3. 学会等名 研究会ディスカッサント, 14th Colloquium of Natural History of Landscape Formation
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 村尾るみこ
2. 発表標題 紛争後のアンゴラ東部農村における帰還民の再統合
3. 学会等名 日本アフリカ学会関東支部会共催「アフリカにおける難民保護と帰還をめぐる諸問題」第2回セミナー
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Rumiko Murao
2. 発表標題 The resilience of former refugees in southern Africa
3. 学会等名 IASFM19, Universidade Catolica De Santos Online開催(国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 波佐間逸博
2. 発表標題 人類学的抵抗論を超えて - サバンナの動物の不服従 -
3. 学会等名 アジア文化研究所第17回年次集会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Shinya Konaka
2. 発表標題 Towards a Localization of Humanitarian Aid beyond Western Universalism : Perspectives from East African Nomadic Societies.
3. 学会等名 Online Symposium "Past, Present and Future of Humanitarian and Development Aid: Rethinking the Aid Sector with Binalakshmi Nepram"
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Tamara Enomoto
2. 発表標題 Racism in the Development and Humanitarian Sector.
3. 学会等名 Online Symposium “ Past, Present and Future of Humanitarian and Development Aid: Rethinking the Aid Sector with Binalakshmi Nepram ”
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 榎本珠良
2. 発表標題 「人道的軍備管理」における人種主義 : Black Lives Matter 運動後の開発・人道支援と軍備管理
3. 学会等名 東京外国語大学現代アフリカ地域研究センター・日本アフリカ学会関東支部共催 : 第57回ASCセミナー
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Go Shimada
2. 発表標題 Comments and questions
3. 学会等名 Online Symposium “ Past, Present and Future of Humanitarian and Development Aid: Rethinking the Aid Sector with Binalakshmi Nepram ”
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Takuto Sakamoto
2. 発表標題 Quantitative Text Analysis of the Speech Records of the United Nations Security Council
3. 学会等名 Academic Council on the United Nations System (ACUNS) Annual Meeting
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 阪本拓人
2. 発表標題 国際安全保障のなかのアフリカ：国連安全保障理事会の政策討議から
3. 学会等名 第1回「アフリカ政策パネル」
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Sayaka Ogawa
2. 発表標題 Comments and questions
3. 学会等名 Online Symposium “Past, Present and Future of Humanitarian and Development Aid: Rethinking the Aid Sector with Binalakshmi Nepram”
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 小川さやか
2. 発表標題 窮地における嘘と笑い タンザニア都市民を事例に
3. 学会等名 第2回 京都こころ会議
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 小川さやか
2. 発表標題 リープフロッグ型発展のゆくえ 東アフリカ諸国を事例に
3. 学会等名 第11回 地域金融変革運動体（金融庁）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Itsuhiko Hazama
2. 発表標題 The resilience of alterity: Sparing enemies among Karimojong cluster
3. 学会等名 JSPSJoint Research: South Africa-Japan "Human Resilience in the face of man-made and natural disaster in Japan and South Africa: Ethnographic Perspective" Japan/South Africa Resilience
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Shinya Konaka
2. 発表標題 Introductory Remarks to the Panel: Pastoralists and Resilience Rethinking the Inside and Outside Perspectives of the Pastoral Communities.
3. 学会等名 IUAES2019 Inter-Congress " Pastoralists and Resilience: Rethinking the Inside and Outside Perspectives of the Pastoral Communities [Commission of Nomadic Peoples]" (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Shinya konaka
2. 発表標題 Rethinking Resilience and Development of African Pastoralists in the Gaps.
3. 学会等名 International Workshop "Thinking Resilience and Development from the "Exceptional " Africa". (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Takuto Sakamoto
2. 発表標題 Computational Analysis of the Speech Records of the United Nations Security Council
3. 学会等名 Social Fabrics Research Lab (FABLAB) Seminar on Big Data Analysis in International Relations at the West University of Timisoara (招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Takuto Sakamoto, Koji Oishi
2. 発表標題 Computational Approaches to Politics and International Relations
3. 学会等名 European Research Center for Political Culture (ERCAM) Workshop at the University of Bucharest
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 阪本拓人
2. 発表標題 「サヘルにおける牧畜民と農耕民の対立と共生：シミュレーションによる検討」
3. 学会等名 龍谷大学社会科学研究所「アフリカ潜在力再検証」研究会（京都）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 阪本拓人
2. 発表標題 「安全保障の言説分析：国連安保理における四半世紀の討議から」
3. 学会等名 日本国際政治学会2019年度研究大会（大宮）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Takuto Sakamoto
2. 発表標題 Measuring Threat Perception: Text Analysis of the Speech Records of the United Nations Security Council
3. 学会等名 The 2nd Annual Conference on Politics and Computational Social Science (PaCSS) at Georgetown University (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Toru Sagawa
2. 発表標題 Pastoralist starts fishing: Dynamics of cultural value on non-pastoral activity among the Daasanach in East Africa, 2009-2015
3. 学会等名 IUAES2019 Inter-Congress "Pastoralists and Resilience: Rethinking the Inside and Outside Perspectives of the Pastoral Communities [Commission of Nomadic Peoples]" (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Toru Sagawa
2. 発表標題 Fishing pastoralist: Livelihood diversification and dynamics of cultural value on non-pastoral activity among the Daasanach
3. 学会等名 International Workshop "Thinking Resilience and Development from the "Exceptional" Africa". (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 小川さやか
2. 発表標題 「投擲的な相互支援を組織する 香港・中国南部の東アフリカ系住民による組合活動を事例に」
3. 学会等名 日本文化人類学会第53回研究大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 小川さやか
2. 発表標題 「香港のタンザニア人による投擲的なコミュニケーションとコミュニティ」
3. 学会等名 国際ワークショップ『東アジアにおける移動と交易 多文化空間、場所、アイデンティティの動態に着目して(国際学会)』
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 小川さやか
2. 発表標題 「無条件であることの条件を追求する タンザニア人の商売とその日暮らしを事例に」
3. 学会等名 大阪大学社会ソリューションイニシアティブSSIサロン『アフリカ 未来社会』（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Itsuhiko Hazama
2. 発表標題 Citizenship Practices in the Resistance.
3. 学会等名 IUAES2019 Inter-Congress “ Pastoralists and Resilience: Rethinking the Inside and Outside Perspectives of the Pastoral Communities [Commission of Nomadic Peoples] ”
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Itsuhiko Hazama
2. 発表標題 Appearance of Alterity: Citizenship Practices in the Resistance of Northeastern Ugandan Pastoralists
3. 学会等名 International Workshop Resonation of Alterity: Way of Coexistence in Pastoral Society in East Africa. (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Itsuhiko Hazama
2. 発表標題 Citizenship Practice in the Resilience.
3. 学会等名 International Workshop "Thinking Resilience and Development from the “ Exceptional ” Africa". (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Xiaogang Sun
2. 発表標題 Pastoralists' Perspective on Vulnerability and Response to Resilience Enhancing Proje
3. 学会等名 IUAES2019 Inter-Congress "Pastoralists and Resilience: Rethinking the Inside and Outside Perspectives of the Pastoral Communities [Commission of Nomadic Peoples]"
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Xiaogang Sun
2. 発表標題 Pastoralists' Perspective on Vulnerability and Response to Resilience Enhancing Project.
3. 学会等名 International Workshop "Thinking Resilience and Development from the "Exceptional" Africa". (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Tamara Enomoto
2. 発表標題 Africa and the West: Norms and Measures for Arms Transfers to Non-State Actors (NSAs)
3. 学会等名 African Potentials 2019: International Symposium on African Potentials and the Future of Humanity
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 阪本拓人
2. 発表標題 「国際社会における脅威認識の動態：自然言語処理と機械学習による分析」
3. 学会等名 日本国際政治学会2018年度研究大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 小川さやか
2. 発表標題 「被調査者のオートエスノグラフィ に参与する事 SNSで紡がれる香港在住のタンザニア人たちのライフヒストリーを事例に」
3. 学会等名 日本文化人類学会第52回学術大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 村尾るみこ
2. 発表標題 「「帰還」と「庇護国での定住」の境界」
3. 学会等名 日本アフリカ学会 第55回学術大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Rumiko Murao
2. 発表標題 Reconstruction of Local Livelihood and Development in Post-conflict society:Stability, Fluidity, and Mobility in Eastern Angola
3. 学会等名 Fifth Conference of the Association for African Studies in Italy Panel titled Rethinking Development in Angola 's Rural Localities
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計61件

1. 著者名 湖中真哉、ピーター・D・リトル、グレタ・センブリチ	4. 発行年 2024年
2. 出版社 京都大学学術出版会	5. 総ページ数 484
3. 書名 「序章 東アフリカ遊牧社会の脈絡からレジリエンスを再考する」(湖中真哉、ピーター・D・リトル、グレタ・センブリチ編『レジリエンスは動詞である アフリカ遊牧社会からの関係/脈絡論アプローチ』1-32頁).	

1. 著者名 湖中真哉	4. 発行年 2024年
2. 出版社 京都大学学術出版会	5. 総ページ数 484
3. 書名 「関係性と脈絡から遊牧民のレジリエンスを考え直す サンプル・ポコット間の紛争（二〇〇四／二〇〇九年）の事例研究」（湖中真哉、ピーター・D・リトル、グレッタ・センブリチ編『レジリエンスは動詞である アフリカ遊牧社会からの関係/脈絡論アプローチ』221-254頁）.	

1. 著者名 湖中真哉	4. 発行年 2024年
2. 出版社 京都大学学術出版会	5. 総ページ数 484
3. 書名 「避難の物質文化 東アフリカ遊牧社会の国内避難民に関する存在論的考察」（湖中真哉、ピーター・D・リトル、グレッタ・センブリチ編『レジリエンスは動詞である アフリカ遊牧社会からの関係/脈絡論アプローチ』255-291頁）.	

1. 著者名 島田剛	4. 発行年 2024年
2. 出版社 京都大学学術出版会	5. 総ページ数 484
3. 書名 「援助でアフリカはレジリエントになるか？ 気候変動による災害が経済成長、農業、紛争に与える影響」（湖中真哉、ピーター・D・リトル、グレッタ・センブリチ編『レジリエンスは動詞である アフリカ遊牧社会からの関係/脈絡論アプローチ』35-65頁）.	

1. 著者名 榎本珠良	4. 発行年 2024年
2. 出版社 京都大学学術出版会	5. 総ページ数 484
3. 書名 「開発・人道支援分野におけるレジリエンスの系譜学 可能性と問題点」（湖中真哉、ピーター・D・リトル、グレッタ・センブリチ編『レジリエンスは動詞である アフリカ遊牧社会からの関係/脈絡論アプローチ』67-94頁）.	

1. 著者名 佐川徹	4. 発行年 2024年
2. 出版社 京都大学学術出版会	5. 総ページ数 484
3. 書名 「東アフリカ牧畜社会における生業多様化とレジリエンス」(湖中真哉、ピーター・D・リトル、グreta・センブリチ編『レジリエンスは動詞である アフリカ遊牧社会からの関係/脈絡論アプローチ』125-150頁)。	

1. 著者名 波佐間逸博	4. 発行年 2024年
2. 出版社 京都大学学術出版会	5. 総ページ数 484
3. 書名 「セカンド・シティズンの幸福」(湖中真哉、ピーター・D・リトル、グreta・センブリチ編『レジリエンスは動詞である アフリカ遊牧社会からの関係/脈絡論アプローチ』125-151頁)。	

1. 著者名 小川さやか	4. 発行年 2024年
2. 出版社 京都大学学術出版会	5. 総ページ数 484
3. 書名 「待機と賭け タンザニアのインフォーマル経済のレジリエンスをめぐって」(湖中真哉、ピーター・D・リトル、グreta・センブリチ編『レジリエンスは動詞である アフリカ遊牧社会からの関係/脈絡論アプローチ』125-152頁)。	

1. 著者名 村尾るみこ	4. 発行年 2024年
2. 出版社 京都大学学術出版会	5. 総ページ数 484
3. 書名 「ザンビア農村部における元難民のレジリエンス」(湖中真哉、ピーター・D・リトル、グreta・センブリチ編『レジリエンスは動詞である アフリカ遊牧社会からの関係/脈絡論アプローチ』125-151頁)。	

1 . 著者名 Shinya Konaka	4 . 発行年 2023年
2 . 出版社 Trans Paciic Press	5 . 総ページ数 507
3 . 書名 'Reconsidering the Resilience of Pastoralism from the Perspective of Reliability: The Case of Conflicts between the Samburu and the Pokot of Kenya, 2004-2009.' in S.Konaka, G, Semplici, and P.D.Little (eds.) Reconsidering Resilience in African Pastoralism: Towards a Relational and Contextual Approach, pp. 219-250.	

1 . 著者名 Shinya Konaka	4 . 発行年 2023年
2 . 出版社 Trans Paciic Press	5 . 総ページ数 507
3 . 書名 'Contextualizing Resilience to Material Culture of Pastoralists and Humanitarian Assistance in Northern Kenya' in S.Konaka, G, Semplici, and P.D.Little (eds.) Reconsidering Resilience in African Pastoralism: Towards a Relational and Contextual Approach, pp. 219-250.	

1 . 著者名 Shinya Konaka, Greta Semplici, and P.D. Little	4 . 発行年 2023年
2 . 出版社 Trans Paciic Press	5 . 総ページ数 507
3 . 書名 'Introduction: Rethinking Resilience in the Context of East African Pastoralism' in S.Konaka, G, Semplici, and P.D.Little (eds.) Reconsidering Resilience in African Pastoralism: Towards a Relational and Contextual Approach, 1-24.	

1 . 著者名 Go Shimada	4 . 発行年 2023年
2 . 出版社 Trans Paciic Press	5 . 総ページ数 507
3 . 書名 'Does Aid Make Africa Resilient?: Disasters' impacts on economic growth, agriculture, and conflicts' in S.Konaka, G, Semplici, and P.D.Little (eds.) Reconsidering Resilience in African Pastoralism: Towards a Relational and Contextual Approach, pp. 27-53.	

1. 著者名 Tamara Enomoto	4. 発行年 2023年
2. 出版社 Trans Paciic Press	5. 総ページ数 507
3. 書名 'Genealogies of Resilience in the Development and Humanitarian Sector: Potentials and Difficulties' in S.Konaka, G, Semplici, and P.D.Little (eds.) Reconsidering Resilience in African Pastoralism: Towards a Relational and Contextual Approach, 55-79.	

1. 著者名 Toru Sagawa	4. 発行年 2023年
2. 出版社 Trans Paciic Press	5. 総ページ数 507
3. 書名 'Livelihood Diversification and Resilience among the East Africa Pastoralists' in S.Konaka, G, Semplici, and P.D.Little (eds.) Reconsidering Resilience in African Pastoralism: Towards a Relational and Contextual Approach, pp. 107-130	

1. 著者名 Itsuhiro Hazama	4. 発行年 2023年
2. 出版社 Trans Paciic Press	5. 総ページ数 507
3. 書名 'Man-animal Social Relationship as the Source of Resilience' in S.Konaka, G, Semplici, and P.D.Little (eds.) Reconsidering Resilience in African Pastoralism: Towards a Relational and Contextual Approach, 251-277.	

1. 著者名 Takuto Sakamoto	4. 発行年 2023年
2. 出版社 Trans Paciic Press	5. 総ページ数 507
3. 書名 'Resilience under Strain: Spatial Dimensions of 'Farmer-Herder Conflict' in the Sahel' in S.Konaka, G, Semplici, and P.D.Little (eds.) Reconsidering Resilience in African Pastoralism: Towards a Relational and Contextual Approach, 305-325.	

1. 著者名 Rumiko Murao	4. 発行年 2023年
2. 出版社 Trans Pacific Press	5. 総ページ数 507
3. 書名 'The Resilience of Former Refugees in Rural Zambia? in the Sahel' In S.Konaka, G, Semplici, and P.D.Little (eds.) Reconsidering Resilience in African Pastoralism: Towards a Relational and Contextual Approach, pp. 327-353.	

1. 著者名 Tamara Enomoto, Marlon Swai, Kiyoshi Umeya, and Francis B. Nyamnjoh eds.	4. 発行年 2022年
2. 出版社 Langaa RPCIG	5. 総ページ数 438
3. 書名 Tamara Enomoto, Marlon Swai, Kiyoshi Umeya, and Francis B. Nyamnjoh "Introduction", pp.1-16, in T.Enomoto et al. (eds.) 'Bouncing back: Critical Reflections on the Resilience Concept in Japan and South Africa'	

1. 著者名 Tamara Enomoto	4. 発行年 2022年
2. 出版社 Langaa RPCIG	5. 総ページ数 438
3. 書名 Tamara Enomoto "Genealogies of Resilience in the Development and Humanitarian Sector: Potentials and Difficulties",pp.19-43, in T.Enomoto et al. (eds.) 'Bouncing Back: Critical Reflections on the Resilience Concept in Japan and South Africa'	

1. 著者名 遠藤貢、阪本拓人	4. 発行年 2022年
2. 出版社 昭和堂	5. 総ページ数 272
3. 書名 ようこそアフリカ世界へ	

1. 著者名 落合 雄彦、松田 素二、浜田 明範、平野(野元) 美佐、佐藤 千鶴子、松本 尚之、中村 香子、 佐久間 寛、阪本 拓人	4. 発行年 2022年
2. 出版社 晃洋書房	5. 総ページ数 256
3. 書名 アフリカ潜在力のカレイドスコープ	

1. 著者名 佐久間 寛、箕曲 在弘、小川 さやか、佐川 徹、松村 圭一郎、酒井 隆史、デヴィッド グレーバー、キース ハート、田口 陽子、林 愛美	4. 発行年 2023年
2. 出版社 以文社	5. 総ページ数 408
3. 書名 負債と信用の人類学	

1. 著者名 Ohta, I., F. B. Nyamnjoh and M. Matsuda (eds.)	4. 発行年 2022年
2. 出版社 Bamenda: Langaa RPCIG	5. 総ページ数 319
3. 書名 African Potentials: Bricolage, Incompleteness and Lifeness	

1. 著者名 Ohta, I.	4. 発行年 2022年
2. 出版社 Bamenda: Langaa RPCIG	5. 総ページ数 21
3. 書名 "Palaver and consensus: How contradictions are reconciled in Africa." In (I. Ohta, F. B Nyamnjoh and M. Matsuda, eds.) African Potentials: Bricolage, Incompleteness and Lifeness, Bamenda, Langaa RPCIG, pp. 97-117.	

1. 著者名 Ohta, I., F. B. Nyamnjoh and M. Matsuda	4. 発行年 2022年
2. 出版社 Bamenda: Langaa RPCIG	5. 総ページ数 5
3. 書名 Postscript: African potentials and the creation of alternative future for humanity. In (I. Ohta, F. B Nyamnjoh and M. Matsuda, eds.) African Potentials: Bricolage, Incompleteness and Lifeness, Bamenda, Langaa RPCIG, pp. 305-309.	

1. 著者名 M. Matsuda, F. B. Nyamnjoh and I. Ohta	4. 発行年 2022年
2. 出版社 Bamenda: Langaa RPCIG	5. 総ページ数 25
3. 書名 "Introduction: African potentials - Bricolage, incompleteness and lifeness." In (I. Ohta, F. B Nyamnjoh and M. Matsuda, eds.) African Potentials: Bricolage, Incompleteness and Lifeness, Bamenda, Langaa RPCIG, pp. 1-25.	

1. 著者名 太田 至	4. 発行年 2022年
2. 出版社 京都大学学術出版会	5. 総ページ数 462
3. 書名 「パラヴァーとコンセンサス アフリカ社会において相克はいかに解決されるか」松田素二, フランシス・B・ニヤムンジョ, 太田至(編)『アフリカ潜在力が世界を変える オルタナティブな地球社会のために』京都大学学術出版会、pp.139-170.	

1. 著者名 松田素二, フランシス・B・ニヤムンジョ, 太田至	4. 発行年 2022年
2. 出版社 京都大学学術出版会	5. 総ページ数 462
3. 書名 「「アフリカ潜在力」とブリコラージュ・不完全性・生活世界」松田素二, フランシス・B・ニヤムンジョ, 太田至(編)『アフリカ潜在力が世界を変える オルタナティブな地球社会のために』京都大学学術出版会、pp.1-39.	

1. 著者名 太田至, フランシス・B・ニヤムンジョ, 松田素二	4. 発行年 2022年
2. 出版社 京都大学学術出版会	5. 総ページ数 462
3. 書名 「跋 「アフリカ潜在力」とオルタナティブな未来の創造」松田素二, フランシス・B・ニヤムンジョ, 太田至 (編) 『アフリカ潜在力が世界を変える オルタナティブな地球社会のために』京都大学学術出版会、pp.429-435.	

1. 著者名 島田 剛	4. 発行年 2023年
2. 出版社 新世社	5. 総ページ数 264
3. 書名 ミクロ経済学への招待	

1. 著者名 島田剛	4. 発行年 2022年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 288
3. 書名 「コーヒーカップの向こう側 - フェアな経済とは何か?」明治大学情報コミュニケーション学部 (編) 『情報コミュニケーション学への招待』	

1. 著者名 波佐間逸博	4. 発行年 2022年
2. 出版社 風響社	5. 総ページ数 162
3. 書名 ナイル遊牧民のライフヒストリーーキバシウシツツキはどうやって青年をふたたび立ちあがらせたのか」シンジルト編 『目でみる牧畜世界 21世紀の地球で共生を探る』, pp.114-125	

1. 著者名 Itsuhiro Hazama	4. 発行年 2022年
2. 出版社 Bamenda: Langaa RPCIG	5. 総ページ数 438
3. 書名 "Resilience of Face-to-Face Identity among East African Pastoralists," pp. 361-385, In in T.Enomoto et al. (eds.) 'Bouncing Back: Critical Reflections on the Resilience Concept in Japan and South Africa'	

1. 著者名 湖中真哉	4. 発行年 2021年
2. 出版社 ナカニシヤ出版	5. 総ページ数 200
3. 書名 「フィールドワークと教育を超える協働実践：グローバルな当事者間のニーズ共有接近法の実験から」(湖中真哉・ディハーン, J.) 箕曲在弘・二文字屋・小西公大(編) 『人類学者たちのフィールド教育 自己変容に向けた学びのデザイン』、pp.139-155	

1. 著者名 小川さやか	4. 発行年 2020年
2. 出版社 河出書房新社	5. 総ページ数 200
3. 書名 「資本主義経済のなかに迂回路をひらく」河出書房新社編集部編 『思想としての＜新型コロナウイルス禍＞』	

1. 著者名 小川さやか	4. 発行年 2020年
2. 出版社 青幻舎	5. 総ページ数 208
3. 書名 「いまだ遭遇していない者を織り込んだ「コミュニティ」 香港のタンザニア人の事例から」ウスビ・サコ・清水貴夫編 『現代アフリカ文化の今 15の視点から、その現在地を探る』	

1. 著者名 村尾るみこ	4. 発行年 2020年
2. 出版社 明石書店	5. 総ページ数 376
3. 書名 「ロジ」島田周平・大山修一編『ザンビアを知るための55章』128頁-131頁	

1. 著者名 村尾るみこ	4. 発行年 2020年
2. 出版社 明石書店	5. 総ページ数 376
3. 書名 「コラム」島田周平・大山修一編『ザンビアを知るための55章』132頁-134頁	

1. 著者名 村尾るみこ	4. 発行年 2020年
2. 出版社 明石書店	5. 総ページ数 376
3. 書名 「アンゴラ難民の生活」島田周平・大山修一編『ザンビアを知るための55章』337頁-340頁	

1. 著者名 太田 至	4. 発行年 2021年
2. 出版社 京都大学学術出版会	5. 総ページ数 306
3. 書名 交渉に生を賭ける	

1. 著者名 湖中真哉	4. 発行年 2020年
2. 出版社 放送大学教育振興会	5. 総ページ数 296
3. 書名 「人新世とグローバリゼーション」(大村敬一・湖中 真哉編『人新世』時代の文化人類学』 33-49頁)	

1. 著者名 湖中真哉	4. 発行年 2020年
2. 出版社 放送大学教育振興会	5. 総ページ数 296
3. 書名 「人新世時代のSDGsと貧困の文化」(大村敬一・湖中 真哉編『人新世』時代の文化人類学』 87-100頁)	

1. 著者名 湖中真哉	4. 発行年 2020年
2. 出版社 放送大学教育振興会	5. 総ページ数 296
3. 書名 「人新世時代のものとの人間の存在論」(大村敬一・湖中 真哉編『人新世』時代の文化人類学』 101-115頁)	

1. 著者名 湖中真哉	4. 発行年 2020年
2. 出版社 放送大学教育振興会	5. 総ページ数 296
3. 書名 「協働実践としての人新世時代のエスノグラフィー」(大村敬一・湖中 真哉編『人新世』時代の文化人類学』 225-240頁)	

1. 著者名 榎本珠良	4. 発行年 2020年
2. 出版社 晃洋書房	5. 総ページ数 258
3. 書名 『武器貿易条約：人間・国家主権・武器移転規制』	

1. 著者名 榎本珠良、ミロシュ・ヴェッツ、松永友有、小谷賢、イド・オレン、タイ・ソロモン、ミシェル・ベントリー、岩本誠吾、福田毅、竹内真人、山下雄二、佐藤丙午、森山隆	4. 発行年 2020年
2. 出版社 日本経済評論社	5. 総ページ数 418
3. 書名 『禁忌の兵器：パーリア・ウェボンの系譜学』	

1. 著者名 Itsuhiro Hazama, Kiyoshi Umeya, Francis B. Nyamnjoh, Anye-Nkwenti Nyamnjoh, Claire-Anne Lester, Ayanda Manqoyi, Tamara Enomoto, Toshiki Tsuchitori, Noriko Tahara, Gaku Moriguchi, Olivia Joanes, Kongo Minga Mbweck, Zuziwe Nokwanda Msomi, Msakha Mona, Marlon Swai, Harry Garuba	4. 発行年 2019年
2. 出版社 Langaa RPCIG	5. 総ページ数 422
3. 書名 Citizenship in Motion: South African and Japanese Scholars in Conversation	

1. 著者名 松本尚之・佐川徹・石田慎一郎・大石高典・橋本栄莉（編）	4. 発行年 2019年
2. 出版社 昭和堂	5. 総ページ数 288
3. 書名 『アフリカで学ぶ文化人類学 民族誌がひらく世界』	

1. 著者名 小川さやか	4. 発行年 2019年
2. 出版社 春秋社	5. 総ページ数 276
3. 書名 『チョンキンマンションのボスは知っている アングラ経済の人類学』	

1. 著者名 Hosono, Akio, John Page, and Go Shimada, eds.	4. 発行年 2020年
2. 出版社 Palgrave Macmillan	5. 総ページ数 327
3. 書名 Workers, Managers, Productivity - Kaizen in Developing Countries.	

1. 著者名 Go Shimada	4. 発行年 2019年
2. 出版社 Columbia University Press	5. 総ページ数 482
3. 書名 Chapter 12: Does Environmental Policy Make African Industry Less Competitive? - The Possibilities in Green Industrial Policy” in Kanbur Ravi・Noman Akbar・Stiglitz Joseph, eds. The Quality of Growth in Africa, pp. 350-372.	

1. 著者名 村尾るみこ	4. 発行年 2020年
2. 出版社 旬報社	5. 総ページ数 471
3. 書名 「ザンビア」(牧野 久美子・岩崎 えり奈 編『新 世界の社会福祉 第11巻 アフリカ・中東』228-254頁).	

1. 著者名 湖中真哉	4. 発行年 2019年
2. 出版社 昭和堂	5. 総ページ数 368
3. 書名 「国家を代替する社会 東アフリカ遊牧社会におけるローカル・インジャスティス」細谷広美・佐藤義明 (編) 『グローバル化する<正義>の人類学 国際社会における法形成とローカリティ』	

1. 著者名 湖中真哉	4. 発行年 2019年
2. 出版社 昭和堂	5. 総ページ数 396
3. 書名 「国家に頼らない遊牧民の生き方 周縁化・併存化・独立国化」太田至・曾我亨編 『遊牧の思想 人類学 がみる激動のアフリカ』	

1. 著者名 孫曉剛	4. 発行年 2019年
2. 出版社 昭和堂	5. 総ページ数 396
3. 書名 「生計戦略の多様化 社会環境の変化に対するレンディーレの対応」太田至・曾我亨編 『遊牧の思想 人 類学がみる激動のアフリカ』	

1. 著者名 波佐間逸博	4. 発行年 2019年
2. 出版社 昭和堂	5. 総ページ数 396
3. 書名 「身体と暴力」太田至・曾我亨編 『遊牧の思想 人類学がみる激動のアフリカ』	

1. 著者名 佐川徹	4. 発行年 2019年
2. 出版社 昭和堂	5. 総ページ数 396
3. 書名 「「男らしさ」を相対化する グサネッチの戦場体験」太田至・曾我亨編『遊牧の思想 人類学がみる激動のアフリカ』	

1. 著者名 太田至	4. 発行年 2019年
2. 出版社 昭和堂	5. 総ページ数 396
3. 書名 ：「交歓と相互承認を創出する 家畜の所有をめぐるトゥルカナ・レンディーレ・ガブラの交渉」太田至・曾我亨編『遊牧の思想 人類学がみる激動のアフリカ』	

1. 著者名 曾我亨・太田至	4. 発行年 2019年
2. 出版社 昭和堂	5. 総ページ数 396
3. 書名 「遊牧の思想とは何か 困難な時代を生き抜くために」太田至・曾我亨編『遊牧の思想 人類学がみる激動のアフリカ』	

1. 著者名 Higuchi, Yuki and Go Shimada	4. 発行年 2019年
2. 出版社 Springer	5. 総ページ数 313
3. 書名 Industrial Policy, Industrial Development and Structural Transformation in Asia and Africa. Keijiro Osuka and Kaoru Sugihara. eds. Paths to the Emerging State in Asia and Africa (Emerging-Economy State and International Policy Studies), pp. 195-218	

〔産業財産権〕

〔その他〕

アフリカ遊動社会における接合型レジリエンス探求による人道支援・開発ギャップの克服
<http://ir.u-shizuoka-ken.ac.jp/resilienceafrica/>
 Exploration of the articulated resilience
<https://ir.u-shizuoka-ken.ac.jp/resilienceafrica/en/>

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	村尾 るみこ (Murao Rumiko) (10467425)	立命館大学・立命館グローバル・イノベーション研究機構・助教 (34315)	
研究分担者	孫 暁剛 (Sun Xiaogang) (20402753)	静岡県立大学・国際関係学部・准教授 (23803)	
研究分担者	波佐間 逸博 (Hazama Itsuhurio) (20547997)	東洋大学・社会学部・教授 (32663)	
研究分担者	阪本 拓人 (Sakamoto Takuto) (40456182)	東京大学・大学院総合文化研究科・准教授 (12601)	
研究分担者	小川 さやか (Ogawa Sayaka) (40582656)	立命館大学・先端総合学術研究科・教授 (34315)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	榎本 珠良 (Enomoto Tamara) (50770947)	明治学院大学・国際学部・准教授 (32683)	
研究分担者	太田 至 (Ohta Itaru) (60191938)	京都大学・アフリカ地域研究資料センター・名誉教授 (14301)	
研究分担者	佐川 徹 (Sagawa Toru) (70613579)	慶應義塾大学・文学部（三田）・准教授 (32612)	
研究分担者	島田 剛 (Shimada Go) (90745572)	明治大学・情報コミュニケーション学部・専任教授 (32682)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計3件

国際研究集会 Online Symposium “Past, Present and Future of Humanitarian and Development Aid: Rethinking the Aid Sector with Binalakshmi Nepram”	開催年 2021年～2021年
国際研究集会 IUAES2019 Inter-Congress “Pastoralists and Resilience: Rethinking the Inside and Outside Perspectives of the Pastoral Communities [Commission of Nomadic Peoples]”	開催年 2019年～2019年
国際研究集会 International Workshop “Thinking Resilience and Development from the “Exceptional” Africa”.	開催年 2020年～2020年

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------